

④ “The New Era of U. S. -China Relations -Power Shift and Co-management”

講師：趙全勝 氏（アメリカン大学アジア研究センター所長）

日時：2008年1月15日（木） 16:30-18:30

場所：慶應義塾大学三田キャンパス 大学院校舎8階 東アジア研究所共同研究室1

言語：英語

報告要旨：オバマ新政権の発足を控え、今後の米中関係がどのように推移するか一般の関心も高まるなか、アメリカン大学の趙全勝教授を迎えてご講演いただいた。

講演者はまず米国と中国は一蓮托生（“Two Ups and Two Downs”）の関係から、「一上一下（“One Up and One Down”）」、すなわち「中国の上昇と米国の下降」へと移行しつつあるのではないかという問題意識に立ち、米中関係の現状を既存の研究や統計データを踏まえて概説した。さらに、中国のソフトパワーの向上には著しいものがあり、今後も発展は続くものの、米国には遠く及ばないとの見通しを示した。そして、両国の関係がMGPR (Managed Great Power Relations) となるための以下の6つの条件を指摘した。

1. 考え方を共有し、相互信頼を高める基盤を作る。
2. 2つのパワーが協力するための適当な動機がある。
3. 国内政治に対処する建設的な手法がある。
4. 組織化と効果的なメカニズムを構築する。
5. 危機回避の対策がある。
6. 重層的な接触によって共通基礎が維持・拡大される。

最後に、MGPR の程度は事例によって異なるだろうが、2つのパワーがバイラテラルな関係を活用していくことになるだろうと考察を加えた。

質疑応答においては、現在の米中関係に関してやオバマ新政権の対応などの時事的質問、MGPR を活かした具体的な政策例やワシントンにおける受け止め方など、現状に対する分析を求めるもの、MGPR の理論的な解釈や日本・韓国の位置づけについてなどの質問が挙げられた。以上の質問に対し講演者は、まずオバマ次期大統領が日本に立ち寄らずに中国を訪問したのは、日米間に根本的な対立がないからであるとし、今後も東アジアにおけるパワー・バランスは米・中・露・日の4カ国によって維持する伝統的なやり方が続くとの見方を明らかにした。また米国の対中戦略については統一の見解はないが、主流の見解は、融和（integrate）を継続することにあり、それがコストを最小化すると考えられていると述べた。